

# 西行

## —西行の隠遁の理由を探る—

外国語学部 国際文化交流学科 4年

小林ちとせ

### はじめに

西行（俗名、佐藤義清）とは、歌人として、僧として、また歴史的偉人として誰もが知る有名人である。私は授業で「白峰」を扱った際に、西行の言動に感銘をうけ、また、以前にも西行の和歌に触れ、興味だったので、今回この論文で西行を扱うことに決めた。西行を論ずるときに鍵となるのが『どうして何不自由なかった俗世から離脱し、出家して隠遁への道を選び、生きたのか』である。彼は比較的高い身分の武士であり、そのまま生きていれば将来安定の道をたどれたにもかかわらず、出家し僧となり、また、その僧の中でも世俗との関係を完全に離脱し、「隠遁」することを目指した。

本論文では、『西行の隠遁の理由とは何か』について考察したい。その際に、「1. 西行の父と母」「2. 西行の官人生活」「3. 西行の出家後の同行」「4. 西行と歌」「5. 隠遁とは」「6. 隠遁最盛期の時代背景」「7.まとめ」「8. 結論」に分けて、論じていく。

### 1. 西行の父と母

西行は元永元年（1118年）に生まれ（「台記・尊卑分脉・宝簡集」目崎p.187）、23才で出家した。そして、建久元年（1190年）の西行が73歳だった時（「長秋詠藻」目崎p.195）に入滅した。

先祖の系譜をたどると、西行は秀郷流という伝統的な武門を持つ家系に生まれた。秀郷流は下野国で発展し、さかのぼると、平安時代の魚名という人物に行き着く。魚名というのは、奈良時代後期に藤原氏の中で最も繁栄した「北家」の房前の子である。その魚名の子には「豪富と権勢をもって聞こえ、また歌道の家としてしられた」（目崎p.10）末茂、「収

奪の悪名高い尾張守藤原氏元命や、『今昔物語』（巻216）の『芋粥』の説話に出て来る利仁將軍、白髪を染めて出陣した平家の侍・齊藤別当実盛、流人頼朝に仕えた安達盛長とその子孫・秋田城介、といった人々を輩出した（目崎p.10）鷺取といて、そしてもう一人、西行の血筋に当たる藤成がいた。藤成は「従四位下伊勢守」だったが、下野国に赴任した際に鳥取業俊という下野国で国衙の史生を務めていた在地豪族と結ばれ、豊沢が生まれ、豊沢も下野国の女と結ばれ、村雄が生まれた。村雄も豊沢も下野国の「国衙の官人」として働き、畿内・近国の守を勤めた。また、豊沢は「武力を駆使して管内の盜賊の追捕や反乱鎮圧にあたる」（目崎p.11）押領使にも任命されている。そして、その村雄の子が秀郷だった。秀郷は、「近江国の三上山に棲む百足を退治し、龍神から無尽の俵を贈られたことによって『俵藤太』と称した」（目崎p.12「太平記」）。という伝説をもつて目崎は秀郷が「一族・郷党下野国内を横行し、国氏の命を奉じない暴れ者であった」（目崎p.12）と評している。しかし、その暴れ者であった秀郷は、「天慶三年（980）三月、常陸平貞盛とともに、すでに坂東諸国を制圧していた謀反人平将門に決戦を挑んだ。将門が貞盛の矢に当たって落馬したところへ、秀郷は馳せ寄って首級をかき斬った。この軍功によって、東国の大豪族としては破格の4位に叙せられ、功田を子孫に伝えることを許され、さらに、下野・武藏両国の守を兼任した」（目崎p.12）。

西行の血筋である秀郷流はこのように確立された。また、西行の曾祖父の公清、祖父の李清、父の康清は秀郷流を継いで、「左衛門位」に代々任官し、「檢非違使」でもあった。西行の父の康清は、祖父の李清の生前の活躍により「左兵衛少尉」に任官し、「白河院の北面」にもなった。馬術にも優れていた。

このように代々続いてきた秀郷流の伝統を西行も

継いでいたことがわかる。

次に、西行の母の血筋を見ていくと思う。「西行の母は『監物源清経の女』とみえている」(目崎 p.17)。監物源清経とは、今様の達人で、後白河院の師匠をするほどだった。流行のスポーツだった蹴鞠にも優れていた。また、清経は「女たちの群がる美濃の墨俣・青墓や難波の江口・清崎などといった遊里の内情にも、精通していたようである」(目崎 p.19)。そして、「好色から芸能まで数寄の諸側面を心得た、いわば広義の数寄者」(目崎 p.21)であった。「数寄者」とは、「人の交わりを好まず、身の沈めるをも憂えず、花散るをあはれみ、月の出入を思ふに付けて、常に心を澄まして、世の濁りにしまぬを事とす」(『発心集』目崎 p.20) るような人々のことである。

西行は、秀郷流の武士の伝統だけでなく、このような母方の「数寄者」であった監物清経の影響も受けているといえる。

## 2. 西行の官人生活

西行は先代の後を継ぎ、檢非違使であり、左衛門尉であった。また、18才で成功(売官すること)し、兵衛尉となる。成功の際に要したものは、絹一万匹だった。この前にも一度、「内舎人」に申請した(『除目申文抄』目崎 p.28)が、任官できなかった(『中右記』目崎 p.28)。このように、成功できる経済的基盤は、一族の有していた莊園にあった。また、西行は川田順の説によると、任官する前に徳大寺藤原実能の家人となっていて、その後、鳥羽院下北面の武士として勤務した。北面は白河上皇の時以来置かれた制度で、院自ら近臣の子弟などの中から選抜し、そばに仕えさせた。選定対象には高い身分は必要なく、五位か六位の人たちで、容装が端麗で、弓術、馬術、に優れていて、詩文、和歌、管弦、歌舞の心得ているというような点だった。また、北面は時に、夜のお務めをするほど主従関係が身分を越えて密接であった。目崎は「歌合・物合などがしきりに催される典雅な北面生活こそ、若き義清が歌道に魅せられるきっかけを作ったのだろう」(目崎 p.37)と述べている。北面に西行が選ばれた背景には、容装が端麗だったことや、2で述べたように、母方の堅物

源経清の影響である蹴鞠が優れていたことや、秀郷流の武術である騎馬、弓射の体得があったからだと思われる。

このように、西行は公私生活の上で周囲から見てことさら不便を感じるようなことはなく、兵衛尉や徳大寺藤原実能の家人や北面などで勤務していた。しかし、このように作り出された、自分にすでに与えられた枠の中にいるのは西行にとって耐えがたいことだったのではないだろうか。伝統を継ぎ、親の功績により与えられた自分の位は、西行自身が努力せずともすでに存在したものだった。西行はこのままでは自分の人生でありながら、自分のものではなくなってしまうと感じたのではないだろうか。このような心情が西行を隠遁へと追いやったのではないか。

## 3. 西行の出家後の行動

水野によると、西行は出家後に初めの草庵として、以前から知っていた聖のいる洛外の嵯峨を選んだ。その間に歌枕を求めて陸奥・出羽を旅している。嵯峨には八年間草庵を結び、その後、途中一年間の善通寺で草庵を結んだことを除いて、約三十年間を高野山中の草庵で過ごした。高野山の次は伊勢で約七年間過ごし、最終的に西行入滅の三年前には洛外の嵯峨に戻り、草庵を結んだ。

以上、四か所で草庵を結んだ西行だったが、その間に、歌枕を求めて旅をしたり、出家前に縁のあった天野の別所の局(待賢門院の中納言の局)や、落飾した待賢門院に結縁するために内大臣藤原頼長に一品教を勧進したり、崇徳院の怨霊を鎮定するために讃岐へ訪れたり、平清盛の命により焼き尽くされた東大寺の砂金の勧進のために陸奥へ行ったりと、僧として活動した。また、西行は「有名寺院にしげく足を運び、天台淨土や法華經信仰と、その派にこだわらぬ仏道修行もし、又、誘われて、大峰の修驗道修行にも挑戦」(水野 p.53) するなど、厳しい仏道修行に励んだ。

西行の隠遁スタイルとして水野の文を引用する。

都塵を離れ山奥深く隠棲しての生活とは異なり、ごく都の婆娑(人が普通に暮らす世界、俗世)

とは遠く離れぬ地の草庵に住み、度々の歌合せや、似たような世捨人との交わりも盛んにして、贈答の歌の数も多い。しかし、多くの歌人といわれる人々が、それぞれ、やれ「歌林苑」だ何だとて、幾つものグループをもった中で、ついに西行はグループに加わることはしなかった（水野 p.39）

私の推測だが、西行がグループに関わるようになかった理由は、西行が隠遁者として、自分を律したためだと思われる。西行は隠遁後も俗世との関係を断ち切りはしなかった。しかし、自分と似たような境遇の世捨人との交友は隠遁者としての西行の甘えではなかったと考える。なぜなら、西行にとって、完全なる隠遁者になることは目標であり、憧憬であったからである。だからこそ、そうなりきれない自分がいることも知者である西行にははっきりと理解できた。それを再認識するためにも、歌人としての同じような世捨人との交友は、西行にとって必要不可欠だった。他の世捨人と交流することで西行は隠遁者としての自分を歌人としての自分から歌うことで、または歌い合うことで、理解したのだと考える。そのような意味で西行は他の世捨て人との関係も保ち、歌人としての自分も保ったのだと考える。

#### 4. 西行と歌

西行は生涯で残したものは歌しかない。後鳥羽院は西行をこのように評した。

西行は、おもしろくてしかも心も殊に深く、ありがたくないできがたき方も共にあひ兼ねて見ゆ。生得の歌人とおぼゆ。おぼろげの人、まねびなどすべき歌にあらず。不可説の上手なり。（「後鳥羽院口伝」岡崎 p.132）

また、岡崎は西行の歌風の特質をこう述べている。

特別な技法もなく平明な歌だという印象を受ける。いったい西行の歌というのはわかりやすい歌が多い（岡崎 p.136）

西行の歌の姿は、歌の道に『堪能』な西行だからこそできるのであって、他の者が真似して詠もう

とすると、「平懐」つまり平凡で何の趣向もない歌に陥るだけだ（岡崎 p.137）

そして、西行の歌が「平懐」なのに対し誰にも真似できない理由として

西行の歌の「言いたきまま」というのは、思いつくままに言葉を並べていくという自然さからくるのではない。歌が自然に見えるように、言葉が選び抜かれたことによってもたされたものだ。つまり、言葉というものがおのずから持つ喚起力にまかせて、三十一文字が研ぎ済ませたさまが結果として、すぐれて「言ひたきまま」のレトリックとなっているところにこそあるのではないだろうか（岡崎 p.148）

そして、このように自然に見えるように言葉を選び抜き、真似できない「平懐さ」のある歌を作り出したのは、西行の歌に対する姿勢だったのではないか。

西行の歌に対する姿勢を佐藤はこう述べている。

西行は、よかれあしかれ、「生得の歌人」であった。しかし、そのことは西行が隠遁者であること、つまり隠遁者たらんとし、彼岸の原郷世界へ到達することを妨げるもの出はなかった（佐藤正英 p.98）

西行の歌は、隠遁者たらんとしてやまない西行の内面の、ある意味であまりにもまっとうすぎるほどまっとうな表現なのである。ここに西行の歌がもつ位相の特異さがある（佐藤正英 p.98）

つまり、西行は「生得の歌人」であったし、西行の歌才は他の者より秀でるものがあった。しかし、西行の歌に対する姿勢は、けっして余暇や遊びではなく、隠遁者であろうとする西行の内面の表現手段であった。

ここで、西行の歌を二首、例に挙げて見ていきたい。

風になびく富士のけぶりの空に消えて 行方も  
知らぬわが思ひかな（目崎 p.1 『新古今和歌集』）  
この歌に対して目崎は窪田の「西行の研究」の文

を引用してこう述べている。

煙の空に消えていくように、あてどもなく、つぎつぎに湧いては消えていく、果てしない雑念があるのである。そういう自己を、あるがままに反省し、大きく客観視しているのである。ある特定の雑念・妄想というものが現在もあって、それを苦痛に思っているのではない。人間としてもたざる得なく、またもっているさまざまな思いを、できるならば捨てたいと願う態度でもついて、そこから歌われている。(目崎 p.3)

年たけてまた越ゆべしとおもひきや 命なりけり小夜の中山 (目崎 p.3)

同じく、この一首に対して目崎は窪田の文を引用している。

自然と人間とを一如に観じる、宗教的に至り得た境地 (目崎 p.3)

求めてやまない求道心と文学的資質とが一つになっていて、観念的に割り切れず、生き続ける人間の声 (目崎 p.3)

歌を詠む知識に乏しいため、窪田や目崎、岡崎の解説に頼りながらの推測にはなるが、西行の書いたこの二首には歌人としての自負や誇り、どうやって技巧を尽くして客を感動させようか、というようなものではなく、隠遁者として、歌を利用しながら、自分の思いを歌っているように思う。西行にとって歌は、楽しむための物ではなかったことは確かである。そして、それは隠遁者であるための西行にとっての一つの方法だったのではないか。

ここで一度、西行が俗世の自分をなげうってまで憧れた隠遁世界について解説することで結論につなげていきたい。

## 5. 隠遁とは何か？

隠遁とは出家の先を行くことである。出家は俗世を捨てて僧になることだが、隠遁は出家し俗世を離脱し、俗世とまったく関わりのない世界に到達することである。(ここで言う「俗世」とは、隠遁という考え方方が根強くあった中世でいえば、「律令体制

内世界」を指す。また、現代でいえば、私たちが暮らしている「日常社会」を示す) 官僧と隠遁を試みた僧とは「俗世とかかわっているか否か」で区別される。隠遁を試みた人々は「隠遁者」と呼ぶ。

隠遁者が俗世と関わりのない世界に到達する手段としては、「人跡まれな山奥や、人里遠く離れた海のほとり、人々が集まる市の中」(隠遁 p69) などに隠れて生活し、可能な限り、俗世を遠ざけて関わりを持たず、俗世から忘れられることで、俗世を離脱することである。また、俗世の人々に対し狂<sup>1</sup>を演じて俗世から捨てられることで、離脱を試みるものもいた。隠遁手段は隠遁者それぞれ多様であった。俗世から離脱する手段で持って、隠遁者が得たいものとは、「生の究極のより所を与える世界」(佐藤正英 p.71) で、「おのれの本来のありようを十全な形で現実のものとして持つことができる世界」(佐藤正英 p.71) である。つまり、彼らは「自分がどうして存在しているのか」、「自分は本来どうあるべきなのか」という人間であれば誰でも一度は考えたことのある問い合わせに対する答えがある世界への到達を、俗世からの離脱をさまざまな方法で試みることにより、真剣かつ純粋に求めたのである。つまり、隠遁とは俗世を離脱することで「自分の生の意味」を求める事のできる究極の手段だったのである。

また、佐藤は隠遁者を以下のように述べている。

隠遁者が、十全かつ純粋に隠遁しきったときには、彼らはおそらくもはや辺境世界<sup>2</sup>にとどまつてはいないであろう。現実世界に属しているところの辺境世界を通り抜けて、彼岸の原郷世界<sup>3</sup>の存在になりきってしまっているであろう。たとえ彼らが辺境世界にとどまっていたとしても、俗世にある人々は、彼らについて語りうることを何一つ持ち得ないであろう。俗世にある人々にとって隠遁者とは、それ故、彼らがどのようなありようをしているにしても、十全かつ純粋に隠遁しきった人々ではなく、あくまで十全かつ純粋に隠遁しようと試みた人々に他ならないのである。(佐藤正英 p72-73)

隠遁者は、おのれの在りようがなお俗世と相重なっているところがあることを鋭く意識せずには

いられない。みずからが不徹底な隠遁者であるという意識こそ、隠遁者を隠遁へと押しやってやまないものである。」(佐藤正英 p73)

すなわち、隠遁者が完全に隠遁者足りえた時、俗世から完全に離脱し、俗世にいる人々には到達し得ない隠遁者それぞれの「本来あるべき世界」、「存在意味のある世界」へ到達してしまっているから、俗世にいる人々には確認不可能になるのであって、私たちが隠遁者を指示すとき、彼らは不完全な隠遁者でしかありえず、より完全な隠遁をしようと試みている人々であることになる。また、不完全な隠遁者である自覚が、隠遁者を更なる隠遁へと向かわせている、ということである。

また、隠遁者は俗世を離脱した時点で「自由人」になれたとも言える。彼らは俗世からの離脱を試みる人々であって、俗世界の事物とは全く切り離された存在でなければならなかった。つまり、隠遁世界は俗世の身分や律令体制から全く無縁の世界であるからである。

隠遁とは、「自分の生の意味」を純粹かつ真剣に追い求められただけではなく、身分の縛りがない「自由人」としての生きられるという魅力的なものであったといえる。

隠遁世界がこのような「自由人」としての枠外のものであったこと、枠にとらわれない自分の人生の意味を追い求められるものであったことが、西行を隠遁へ追いやった一つの理由であるのだ。

## 6. 隠遁最盛期の時代背景

律令体制があった時代の中でも、奈良時代から平安時代中期では隠遁の考え方がその時代人にとってかなり違っていた。桜井氏は奈良時代の隠遁思想についてこう述べている。

奈良時代の人々は隠遁の考えをもっていたけれど、そういう生き方に身を賭けるようなことはしなかった(桜井 p.17)

この時代の貴族たちは、たとえ実生活上の失意により生ずる苦悩から一度は現実の世に失望し、

たとえば来世の救いをえようと考えたとしても、その苦悩を内面的・思想的にあまり深めようとせず、すぐ現世的なものの考え方の側へ問題を引き戻し、世俗的な欲望の充足を求めたのである(桜井 p.17-18)

このように、奈良時代の人々が隠遁者足りえなかった理由として、その時代の社会、律令体制のありようがあげられる。奈良時代では、「律令国家の体制が成立し発展した時期」で、「律令国家の全面的解体の日は遠かった」(桜井 p.18)のである。つまり、隠遁最盛期を迎えるには、「律令体制が荒廃し、後退している時期」で、「律令国家の全面的解体が目に見えて近い」ときであるといえる。それが日本では平安中期以降であったといえる。

また、平安中期以降に日本で隠遁最盛期を迎えた理由として、饗庭は「末法の意識」を挙げている。末法の説明として饗庭は「日本靈異記」参照している。

夫れ善惡の因果は内經に著れたり。吉凶の得失は諸を外典に載せたり。今に是の賢劫の釈迦一代の教門を探るに、三つの時有り。一つには正法の五百年なり。二つには像法の千年なり。三つには末法の万年なり。仏の涅槃したまひしより以来、延暦六年の歳の次丁卯に迄るまで一千七百二十二年をへたり。正像の二つを過ぎて、末法に入れり。然して日本に仏法の伝わり適めてより以還、延暦六年に迄るまで、二百三十六歳をへたり。(饗庭 p.14)

「日本靈異記」では時代を、「正法」、「像法」、「末法」と三つに区分した。「正法」というのは、「仏の教えがよく守られ、行われた時代」で、「像法」というのは「仏の教えが形だけ行われていた時代」で、「末法」といのは「仏の教えが全く行われない時代」とした。また、「正法」は仏教が伝えられてから、500年間で、「像法」はそれから1000年の間で、末法はそれ以降となる。平安時代中期以降にはこの末法の時代観が根強くあつたと饗庭は述べている。

このように、隠遁者を多く輩出した平安時代中期以降は、律令体制が荒廃、後退していて、時代人の多くがそれを感じ取ることができるような時代で、

また、「仏の教えが全く行われていない時代」であるという末法の時代観があったのである。そして、その時代に西行は生きていた。西行もこのような考えを受け継いでいたと考えられる。

## 7.まとめ

1では西行の父と母から迫ることにより、彼が秀郷流の武士の伝統を次いでいたことや、数寄者だった母方の監物源経清の影響を受けていたことを示した。

2では西行の官人生活が周囲から見る分には不便なく見えるようだが、西行自身が努力せずとも与えられた位や、場所が西行を枠の中に閉じ込めてしまっていた。そして、この状況が、西行に自分の人生を自分の物ではないという心情を抱かせ、隠遁への憧れを強めさせる結果となったことを示した。

3では西行の出家後の動向から、隠遁者としての西行と俗世との関わりから、西行の隠遁への考え方を示した。西行は、極端に俗世を遠ざけたわけではなく、俗世から遠くない草庵場所を選び、俗世界の人々とも親交を保った。特に自分と似たような世捨て人との交友も保った。それは一見隠遁者としては正しくないと思われる。しかし、その行動には隠遁者としての甘えはなく、むしろ、俗世の人々と交友することで、また、自分と同じような世捨て人と関わることで、隠遁者としての自分を見つめなおす機会を作っていたのではないか、という考えを示した。

4では西行が唯一残した歌の特質が真似のできない「平懐さ」があるのは、西行の歌才に加えて、西行の歌に対する姿勢が、歌を楽しむことや、歌でもって他人を感動させるというものではなく、歌で自分の気持ちを歌うことにより、隠遁者としての自分を再認識するという物であったからだと言うことを示した。

5では隠遁が律令体制下にあった時代の人々が自らの生の意味を追い求めるために、俗世を離脱することであることと、隠遁者が本当に隠遁しきった時には確認不可能であるために不十分な隠遁者でしかりえないこと、しかし、その自覚が隠遁者を隠遁へと追いやっているという関係性、そして、隠遁世界が俗世の身分や律令体制から全く無縁の世界であ

るから、隠遁とは、「自分の生の意味」を純粋かつ真剣に追い求められただけではなく、身分の縛りがない「自由人」としての生きられるという魅力的なものだったからこそ、俗時代の西行が隠遁することへの憧れを抱かせ、隠遁へと追いやったことを示した。

6では隠遁が平安時代中期以降に最盛期を迎えたのは、律令体制が成立して発展していた奈良時代と比べて、体制が崩壊や後退したであったことや末法の考え方方が広がったことが背景にあり、西行もその時代人の一人であったことが西行を隠遁へと追いやる理由の一つになったことを示した。

## 8.結論

西行の隠遁理由はたくさん的人が様々な説を述べている。それは大まかには五つで、一つ目に、「不安な世情によって世間一般に蔓延していた無常観とする説」、二つ目に、「近親者の急死による悲觀によるとする説」、三つ目に、「恋愛問題にからむ煩惱からの逃避説」、四つ目に、宮廷に仕えての身分の固定化よりする前途への閉塞感とする説」、五つ目に、「数寄を求めるのに徹するためとする説」である。

私は今回調べた中で、これらのどの説も西行が隠遁へと踏み切った理由に当てはまると思う。しかし、ここに一つ加えたいのが、西行にとって隠遁することが俗世からの逃げというようなマイナスなものではなかったと言うことである。今回調べた中で、西行は歌に対しても俗世との関わりに対しても、隠遁者に至らない自分を反省して、再認識し、隠遁へと前向きに憧れ、自分の人生を自分の人生として得るために努力したのである。西行は隠遁時代最盛期に生きたひとであり、西行の行動、西行の歌に対する姿勢や考え方はすべて真の隠遁者たることに帰結する。そして、西行は隠遁者となることで身分の区別なく、一心に自分の生の意味を求める「自由人」としての生涯を選んだのではないか。そこには上の五つの説のようなマイナスな思考ではなく、隠遁への憧憬というプラスの思考が隠遁理由の最大要因であったのではないかと私は考察する。

## 註

- 1 「狂」とは隠遁の一つの形であり、狂っているように装うこと。例としては乞食に扮するなどがある。
- 2 「辺境世界」とは俗世の周辺にあるが律令社会の支配が直接及ばない場所で、隠遁者が隠遁を目指すためにいるところ。
- 3 「彼岸の原郷世界」とは隠遁者が求める生の意味や答えがある場所で、隠遁者が隠遁仕切った時に到達する場所。

## 参考文献（以下は字数に含まず）

- ・饗庭孝男『日本の隠遁者たち』ちくま新書 2000 年
- ・目崎徳衛『西行』吉川弘文館 2004 年
- ・佐藤正英『隠遁の思想』東京大学出版会 1983 年
- ・水野精一『月と西行』思文閣出版 1992 年
- ・佐藤和彦・樋口州男 編『西行のすべて』新人物往来社 1999 年
- ・『西行のすべて』全著者一覧
- ・『西行とその時代』 佐藤和彦
- ・『西行の出自』 堀内寛康
- ・「北面の武士・西行」 野口実
- ・「西行遁世」 野村育世
- ・「西行と高野山」 松井吉昭
- ・「西行讃岐の旅」 樋口州男
- ・「西行陸奥の旅」 志立正知
- ・「紅葉の山家」 岡崎真紀子
- ・「西行の跡を慕う人々」 錦昭江
- ・「西行と民間伝承」 小野一之
- ・「西行関係人物事典」 佐藤和彦
- ・「西行関係史跡事典」 小市和雄
- ・桜井好郎『隠遁の風貌』稿書房 1976 年